京都大学	博士(文学)	氏名	金　　銀　児
論文題目	四川地域仏教彫刻に関する研究 ― 唐代川北地域を中心に ―		

（論文内容の要旨）

唐代を通じて、多岐にわたる図像や構成が見られる四川省の一連の仏教彫刻は、その多様性の点で、きわめて貴重な資料である。本論文は、この四川地域における仏教彫刻の多様な諸相を提示し、このような現象がどのように民衆によって理解され、造形化されていったかを明らかにすることを目指したものである。

本論文の構成は、概要と方法論を提示した「序章」に続き、全五章からなる本文の各論と、本論文のまとめに当たる「結章」からなっている。以下、本論文の中核となる本文五章についてその要旨を記す。

第Ⅰ章「四川省広元皇沢寺第２８窟について」は、広元皇沢寺第２８窟の諸像を取り上げ、中尊の尊名を明らかにすることで、釈迦と阿弥陀像の図像の共有という問題、ひいては初唐期四川地域における釈迦と阿弥陀像の造像様相についての把握を試みている。中尊の尊名については、従来観音・勢至像を脇侍とする点が重視され、阿弥陀仏とする見解が通説化しているが、皇沢寺第２８窟諸像は、中尊が観音・勢至像を脇侍とする一方で、迦葉・阿難や八部衆を伴う構成をとる点が注目される。論者は、関係する現存作例を検討し、初唐期四川地域では阿弥陀・観音・大勢至三尊像への関心がそれほど認められず、また僧侶の思想傾向をみると、益州（四川地域）における当該期の思想傾向にも積極的な阿弥陀信仰を見出すことは困難であるとした。さらに、第２８窟中尊像のような宝珠を持物とする如来像を通覧すると、その尊名を「釈迦」とする例が三例ほど確認されることなども併せて考慮すれば、第２８窟の如来立像は阿弥陀仏というよりも、釈迦として制作された蓋然性がより高いと主張した。さらに、第２８窟の中尊像が釈迦と推定される一方で、観音・勢至菩薩を脇侍とする背景には、無量寿仏を釈迦の本身とみなす本迹二門という思想の存在や、法雲の『法蓮経義記』、智顗の『請観音経疏』・『妙法蓮華経文句』といったテキストから、如来像の寿命と常住の問題に関して議論を続けてきた中国仏教の教義的な問題の存在があったことなども指摘した。

第Ⅱ章「四川省広元千仏崖蓮花洞触地印像について」は 、荘厳触地印像のうち、三世仏の一つとして制作された蓮花洞北壁像を取り上げ、この像の尊名を考察することで四川地域における荘厳触地印像の展開の様相や、荘厳触地印像における蓮花洞北壁像の位置づけを試みている。ここでは、まず四川地域で制作された触地印像や、関連経典が漢訳された時期を時代順に検討し、尊名の変化を考察している。また髻珠の表現については、蓮花洞北壁像が当時一般的であった宝冠を戴いている図像ではなく、

肉髻に髻珠を表現する形式を採用したことに着目し、蓮花洞のように肉髻の正面に髻珠が飾られる形態は、『釈迦方志』から確認される頂上髻珠とは異なることを指摘した。頂上髻珠像は、中・南インドで確認されるほか、類例は少ないものの、正面に髻珠を表現する例がスワット地域に存在し、その伝統は、１～２世紀のペシャーワル・ラホールなどの北インド（ガンダーラ）にあることが確認できるが、髻珠装飾のある触地印像が中国へ輸入される際、何通りかのルートによってもたらされた可能性があることを推測した。そして、中国化された肉髻相の表現の中では見られなかった髻珠が、蓮花洞北壁触地印像で再び現れる理由については、７世紀から始まった玄奘（６０２～６６４）や、慧超（７０４～７８７）などによる求法活動との関係を想定している。続いて論者は、蓮花洞北壁像の尊名について、この像が現在確認される荘厳触地印像のうち、三世仏の一つとして制作された唯一の作例である点に注目し、仏頂尊像、毘盧遮那仏、盧舎那仏である可能性について検討した。その結果、蓮花洞が開鑿された時（６９６～６９７以前）には、仏陀跋陀羅訳の『六十華厳経』（４０８～４２０）は漢訳されていたが、実叉難陀（６５２～７１０）の『八十華厳経』（６９５～６９９）の漢訳が完了してなかったことに基づき、蓮華洞北壁像の荘厳触地印像は、『八十華厳経』の毘盧遮那仏ではなく、『六十華厳経』での盧舎那仏が現在仏として表されたとした。最後に、釈迦像として制作された蓮花洞第１０号龕と比較することにより、荘厳触地印像における蓮花洞北壁像の図像的位置づけを確認し、１０号龕のような双領下垂式の荘厳触地印像が、釈迦のみならず阿弥陀仏としても制作され、双領下垂式という着衣形式を取っていることから、触地印像についての中国的解釈が行なわれていたとした。

第Ⅲ章「７世紀以降の弥勒像の展開について ― 四川省磨崖造像群の作例を中心に ―」は、四川地域の磨崖造像群の作例を取り上げ、当時の四川地域における弥勒信仰の在り方を考察するものである。論者は、四川省における七世紀以降の弥勒像を概観すると、五尊・七尊または三尊像の一つとして、唐代以前からの伝統的な形式の弥勒像が確認される一方、釈迦との二仏並列像、或いは多様な脇侍を伴うものなど、前代とは異なった、唐代、更には四川地域に特有の制作傾向も看取できるとした。また、弥勒三部経に関する窺基の注釈書の『観弥勒菩薩上生兜率天経賛』巻下を見ると、弥勒信仰に対する当時の理解は、上生・下生の二区分によるものではなく、衆生の根機によって区別されるものであったとした。こうした信仰のあり方を敷衍すれば、唐代の弥勒像の宗教的機能として、下品人には下生する如来との出会い、中品人には兜率天への上生、上品人には受戒といった機能が想定されるとした。さらに、『法苑珠林』「弥勒部」において「受戒部」が特に言及される点や、『法苑珠林』の制作年代、あるいは窺基の活動時期などを考慮すると、唐代の弥勒像には、前代と比べて「受戒」の場における機能がより強調された可能性があったとした。そして、このような意識が生じた時期としては、法蔵が活動した武周期以前、窺基などの法相宗僧侶の活動時期に求め

ることができると推測した。また、釈迦と弥勒の二仏並列像は、一つの龕に二つの如来像を制作することにより、「仏名礼懺・礼拝」、「観仏・受戒」という二つの宗教的機能が拡大されたと考えられるとした。さらに、釈迦・弥勒の二仏並列像には、「受戒」という機能だけでなく、兜率天への上生も意識されていたことが想定され、先にみた弥勒三部経に関する窺基の注釈を考慮しても、弥勒像の担う宗教的な機能が一つではなく、信者の根機によって、観仏による「受戒」や上生・下生といった様々な願目に関わるものであったとみてよいとした。

第Ⅳ章「唐代四川地域における薬師像の研究 ― 他の尊像との関連を中心に ―」は、四川地域で制作された薬師像がどのような変遷と変容の過程を経たかという点を検討し、図像構成の原理・機能について考察を試みたものである。まず、四川地域で制作された薬師像の全貌を把握するため、初唐から晩唐まで制作された多様なタイプの薬師像を形式上の特徴に基づいて分類・検討を行っている。ここで、論者がとりわけ注目したのは、釈迦・薬師像の二仏並列像と薬師・地蔵・観音像の三尊像である。第Ⅲ章で考察したように、釈迦・薬師像の二仏並列像は、釈迦・弥勒像の二仏並列像とともに四川地域仏教彫刻の特徴として認められる。また、薬師・地蔵・観音像の三尊像も、敦煌石窟の壁画に多少の作例があるのみであり、龍門石窟の銘文から確認できる彫刻の中からもその作例が見つからず、四川地域の特徴として認められると判断している。また、釈迦・薬師の二仏並列像については、巴中南龕第１０６号龕を取り上げ、その制作背景についての考察も行っている。この作例の造像記からは、釈迦は薬師如来像の本師であること、脇侍菩薩が観音・勢至であること、発願に現世利益的側面が窺えること、恐らく極楽浄土を意味する「极楽世界」への往生を望んでいることが判明するが、注目されるのは「極楽浄土」の問題であるとする。これに関しては、東晋・帛尸梨密多羅（３１７－３２３）訳の『灌頂拔除過罪生死得度経』(以下『灌頂経』)、隋・大業１１年（６１５）達摩笈多訳『薬師如来本願経』、永徽元年（６５０）の玄奘訳『薬師瑠璃光如来本願功徳経（薬師経）』、景龍元年（７０７）の義浄訳の『薬師瑠璃光七佛本願功徳経（七仏薬師経）』といった関連経典を通覧すると、薬師瑠璃光仏の功徳を聞けば、阿弥陀仏国土への往生が可能となり、臨終のとき八大菩薩の迎えによって浄土へ導かれるという話が繰り返し書かれている点に留意している。さらに、これらの経典には、薬師像の造像の功徳についても、薬師瑠璃光仏に礼拝すると、十方の妙楽国土での往生や、兜率天で弥勒を見ることもできると書かれていることも指摘している。これら諸経典、特に中国における偽経である『灌頂経』などの記載を考慮に入れれば、薬師信仰と極楽往生との結びつきが明らかになるとした。なお、薬師・地蔵・観音像の組み合わせについて、論者は、阿弥陀、地蔵、観音像の図像が流行する中で制作されたものと判断した。すなわち、阿弥陀・地蔵・観音像は浄土教関係経典に基づいて制作されたという先行研究の解釈を認め、「極楽浄土」への往生が求められた『薬師経』の内容から、阿弥陀像の代わりに薬師像が配置されたと解釈するのであ

る。この背景としては、薬師像の「呪術的現世利益」、また地蔵像と薬師像とを並べることで「冥部救済」が意識されたという機能的な側面を想定している。

第Ⅴ章「仏・天尊像の制作を巡って ― 四川省巴中地域の作例を中心に ―」は、四川地域における仏・道像の作例を紹介し、この地域で唐代を通じて仏・道像が制作された背景や表現の理由を、複雑な民間信仰の一端から考察したものである。論者は、唐代四川巴中地域の仏・天尊像はわずか４躯に過ぎないが、制作時期が初唐から晩唐に至るため、当該地域における仏・天尊像の展開を知るための重要な資料となっているとしている。そして、巴中地域を含む四川地域で仏・天尊像の制作が盛行し、継続してなされた背景としては、四川地域で根強く道教を信じていた民衆らが、初唐期に道教と対立しつつも、それと混淆した仏教を受容し、二つの宗教を同時に信奉していたという多層的な信仰形態があると主張した。さらに、二仏並列像との比較を行い、仏・天尊像の宗教的な機能を論じている。すなわち、仏像と道像が共に表わされることで、現在までの懺悔と滅罪、そして来世への救いという機能が期待された可能性を指摘したのである。また、仏像を向って左に、道像を向って右に置くという図像配置から、四川地域全体の信仰の一端を窺うことができるとし、元始天尊の道教教理の体系が、六朝時代後期を経て、唐代に至って完成し、それに伴って元始天尊の地位が向上し、仏教の釈迦と同等になり、これにより仏像（左）・道像（右）という配置が行われるようになったと主張している。

「結章」は、本文五章の概要の記載が中心となるが、四川仏教彫刻の特徴として、第一に初唐期四川地域においては阿弥陀信仰に対する関心は見られず、中原地域とは異なる様相をみせていること。第二に四川地域において触地印像の展開は複数存在し、また荘厳触地印像の段階的な展開も認められること。第三に弥勒像を釈迦とあわせて制作したり、西方浄土との関わりをもった尊像を大胆に組み合わせることなどにより、懺悔・滅罪・受戒といった宗教的実践、上生・下生といった弥勒信仰から期待される宗教的機能を効果的に表現したこと。第四に他地域では見つからない薬師・観音・地蔵を組み合わせることで、一人残らず救われようとする、より強烈な念願を祈る民衆仏教としての特徴が見て取れること。第五に、四川地域の民衆は、仏像を天尊像と共に制作することより、効率的に仏教・道教を融合させていること、といった取り纏めを行い、これを付加して本論文を終えている。

（論文審査の結果の要旨）

四川省の唐代仏教彫刻は、磨崖仏を中心に多岐にわたる図像や尊像構成が見られ、その多様性は中国彫刻史上特筆すべき点がある。しかしながら、四川省の仏教彫刻は、その多様性の故、従来の研究は現状の調査報告が中心となっていたところがあった。本論文は、この四川省、特に広元や巴中地域の石窟に代表される川北地域の石窟を中心に唐代の仏教彫刻を研究対象とする。ここでは、この地域の唐代仏教彫刻の多様な諸相が提示されるだけではなく、これを分析し、主要尊像の尊名や尊像構成の確定、あるいは造形化の教義的背景などの諸問題が論じられ、四川地域の仏教彫刻の特色を明らかにする意欲的な試みがなされている。

「序章」「結章」を除く計五章の本文からなる本論文の検討を通して得られた主要な成果としては、以下の五点を挙げることができよう。第一点は、広元皇沢寺石窟第２８窟について、その中尊の尊名を釈迦如来と推測した点である（第Ⅰ章）。この中尊像は、観音・勢至を脇侍としていることもあり、その尊名については阿弥陀と見なすのが従来の一般的な見解であった。しかしながら、論者は、四川地域の彫刻の造像状況や宝珠を持す点などに注目して新たな見解を提示した。広元皇沢寺石窟の主要石窟の中尊の尊名について、名称変更と尊像構成について、従来の見解に見直しを迫るものである点は評価されよう。また、観音・勢至菩薩を脇侍とする背景として、無量寿仏を釈迦の本身とみなす本迹二門という思想の存在があったことなどの指摘も注目される。

第二点は、広元千仏崖蓮華洞北壁の荘厳触地印像を取り上げ、この尊名を考察することなどにより、四川地域おける荘厳触地印像の多様な展開の様相を明らかにしたことである（第Ⅱ章）。論者は、四川地域で制作された触地印像や、関連経典が漢訳された時期を時代順に検討し、尊名の変化を考察し、三世仏の一つとして造像された蓮華洞北壁の荘厳触地印像が、仏頂尊像ではなく、また『八十華厳経』の毘盧遮那仏でもなく、『六十華厳経』での盧舎那仏が現在仏として表されたものであることを明晰に論じた。この荘厳触地印像は、当時一般的であった宝冠を戴かず、肉髻に髻珠を表現する形式を示しているが、このような特異な像容の問題を含め、四川地域における多様な様相を示す荘厳触地印像の展開の一端を明らかにした点は、注目される。

第三に唐代の四川省で盛んに造像された弥勒像の尊像構成の多様性と、釈迦との二仏並列像がしばしば造像されるといった特異性を明らかにし、その造像の背景として受戒や来世における救済の問題などがあることを指摘した点である（第Ⅲ章）。受戒の問題などは、果たして四川地域仏教に特有の問題なのかはなお検証が必要と思われるが、唐代四川地域で弥勒像の造像が盛行した背景を解明する手掛かりは提示できたと思われる。

第四に唐代四川地域における薬師如来の尊像構成の展開を明らかにし、釈迦との二仏並列像や、薬師・地蔵・観音の三尊といった、この地域特有の尊像構成の造像背景の解明に新たな見解を提示したことである（第Ⅳ章）。釈迦・薬師二仏並列像の造像背

景については、すでに第Ⅲ章で一見解を提示していたが、ここでは巴中南龕第１０６窟の造像銘記などの考察により、薬師への信仰が極楽往生に繋がるとした『灌頂抜除過罪生死得度経』(『灌頂経』)などに依拠した信仰があったことを示唆した点は注目される。また、地蔵との組み合わせについても、薬師の呪術的現世利益などの信仰が背景にあったことなどを指摘した点も興味深い。

第五に巴中地域を中心とした仏・天尊並列像を例として取り上げ、唐代四川地域における仏・道教混淆の様相の一端を明らかにしたことである(第Ⅴ章)。前代までは、仏・道像を並列する場合、仏像を左（向かって右）に置くものが一般的であったが、唐代巴中では北龕第２３龕のように道教の天尊像の方を左に置くものが見られるようになる。こうした造像が行われた背景として、論者は道教信仰が根強く残る唐代四川地域において、元始天尊の道教教理体系が唐代に入り完成し、それに伴い元始天尊の地位が向上し、道像を仏像よりも上位のものと見なす信仰が広まっていたことを推測した点は興味深い。仏・道教の混淆については少し単純化し過ぎるところがあるが、斬新な見解として注目される。

このように本論文は、各章の関連性は必ずしも密接ではなく、論文として統一性に些か欠けるところがあるが、唐代四川地域の仏教彫刻の多様な特色を明らかにし、随所に斬新な見解を提示したものとして評価される。しかしながら、提唱された見解の中には、仏・道教混淆の取り扱いなど、なお慎重な検証を要求されるものも含まれている。また、文献史料の取り扱いなどについては、なお一考の余地がある。ただ、唐代四川地域の彫刻史研究は新資料の整理に未だ追われているところがあり、本論文は、このような状況にある四川彫刻史研究から一歩踏み込んだ新たな試みといえる。先の諸問題の克服については、論者のさらなる研究の進展を待ちたい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。２０１１年８月９日、調査委員３名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。